
川端康成全集

第三卷

禽 獸

新潮社

川端康成全集第三卷

禽 獸

昭和四十四年九月二十五日發行
昭和四十八年十一月十日三刷

定價 千七百圓

著 者 川 端 康 成

發行者 佐 藤 亮 一

印刷者 塚 田 重

印刷所 塚田印刷株式會社

原 色 版 半七寫眞工業株式會社

製本所 新宿・加藤製本所

東京都新宿區矢來町七一

發行所 株式會社 新潮 社

電話東京〇三二六〇一一二一
千一六二 振替東京八〇八番

亂丁本、落丁本は本社又はお買求め
の書店にてお取替へいたします。

第三卷
目次

それを見た人達……………	七
浅草の九官鳥……………	二五
慰 靈 歌……………	九三
化粧と口笛……………	一一三
二 十 歳……………	二〇五

寢

顔

二二七

禽

獸

二五一

散りぬるを

二七五

夢の姉

三二五

虹

三四五

禽

獸

それを見た人達

一

それを見た人達のうち、警視廳鑑識課の技師の見方は、熟練した醫師の、しかも一屍體に十三日間を費しての、また現場檢證の報告であるために、最も正確であり、最も精細であるが、その鑑定書の全文を今ここに寫し取することは、いたづらに酸鼻を弄ぶか、とも思はれるし、いささか文學の必要を越える嫌ひもある。だから、その屍體鑑定の大略を左に抄録するに止めよう。

とはいへ、これは後になつて分ることであるが、それを見たのは、この醫師ただ一人だったのである。彼のほかの、それを見た人達は、それを見なかつたのである。してみれば、この醫師がこの小説の主人公とならねばならない。しかし私はここに、それを見た人達と題して、實はそれを見なかつた人達のことを書かうと思ふのである。法醫學的な術語の裏に、鑑定者のどのやうな心が隠れてゐようとも、屍體を見る玄人くふうとの彼は、一先づ私の小説の扉の外にしめ出すのである。

けれども、これは架空の物語ではない。私のいはゆる、それを見ながらそれを見なかつた人達も、警保局發行の「警察研究資料第十八輯」に記載されてゐる、實在の人物ばかりである。彼等がいかにそれを見たか、或ひは見なかつたかといふことを、鑑識技師の見方と比較するところに、この小説は成り立つので、酸鼻の言葉は多少柔げるにしても、やはり鑑定書の抄録を避けるわけにはゆかない。さて、その屍體の髪は脱け落ち、頭顱とうくわうは白骨となり、腦味噌は融けて、頭骨のなかは空っぽであつ

た。

齒は齒莖を離れて、あたりに散らばり、舌もあとかたなく、頬と頸とを暗褐色の皮らしいものが僅かにつないでゐるだけで、顔も白骨であつた。

喉頭、氣管、食道は、形なく崩れ果て、汚穢暗色の脊柱骨が露はで、後頸部の軟骨が半腐りに残つてゐた。

乳房は姿なく、肺臓は暗褐色の泥となり、心臓も薄つぺらとなり、いづれも胸の奥に沈んで、検査も出來ず、肋骨が露はな間から、胸腔の内が見えた。

腹は蒼白く膨れ上り、腹壁のところどころの胃針頭大の穴から、蛆蟲が出てゐた。胃の内は空つぽで、表面も内面も淡桃色であつた。肝臓は淡黒色に、脾臓は暗黒色に、膀胱は淡桃色に、いづれも萎縮してゐた。腸管は赤くて、ガスで膨れ、上半部は空つぽ、下半部には黄色く軟かい泥のやうなものがつまつてゐた。黒く縮かんだ腎臓の内も軟かい泥のやうであつた。膀胱は白く、空つぽであつた。妊娠はしてゐなかつた。これらの内臓は皆、検査も出來ないほどになり果ててゐた。

手は骨が露はに、腕や指の關節もたいていは離れ、指の骨が散らばり落ち、残つてゐる軟部組織は汚穢暗色か、淡褐藍色であつた。

足も下の方へゆくほど骨が見えるが、大腿部や臀部などに残つた軟骨組織は褐黄色であつた。

〇〇部一帯の軟部組織は、汚穢暗色の腐つた粥のやうに融け、蛆蟲が群がり、縫合の骨面が突き出てゐた。構造は明らかでないが、大體の輪郭から女であることが認められた。

齒や骨のありさまから、二十歳以上三十歳くらゐの年頃と思はれた。

屍體の腐敗現象が甚だしいといふよりも、ところどころは腐敗の経過も終り、もう滅失してしまつてゐるので、學術上死因を斷定することは出來なかつたが、異狀と見られるものは、髪と頭にあつ

た。

頭の毛は流行おくれの束髪形のまま、頭から一尺六寸も離れたところに、脱け落ちて轉がつてゐた。それを調べてみると、六寸くらゐに斷つた地毛に、鬘を取りつけたものであつた。

また頸には、長さ一尺七寸くらゐの羽二重絞の細紐を二重に巻き、頸の左で蝶形に結んであつた。死人自らそんな花結びをするわけではないが、首が腐つてしまつてゐるために、その紐が死因かどうかも分らなかつた。

屍體は仰向けに寝てゐた。

二

中野電信隊の一部隊が、演習地の雜木林に露體した。波川一等卒は飯焚きの薪を拾ひ歩きながら、いつともなく林深く分け入つてゐた。

六月はじめの夜の八時頃、星明りであつた。

林に枯枝を拾ふといふやうなことは、古里の思ひ出じみてゐる。しかし彼は東京育ちであつた。けれども歩いてゐるうちに、やはり彼も少年の無心に落ちこんでゐた。そしてふと立ち止つた時は、木々が風に鳴つてゐるのに驚いた。急に家に逃げ歸る子供のやうな、夜の恐れを感じた。屍體が彼の近くにあつたのである。

緑のはげしい薫りだと思つた。それはつかのまで、動物の腐る臭ひが鼻を突いた。薄明りの底に、黒いものを白骨が縫つて見えた。まつしぐらに駈ける一等卒は、足を踏む土に晝のぬくみを、そして頬に觸れる葉に夜の冷たさを、さういふちくはくな自然に追はれるやうな氣持だけが、冴え冴えと分

るだけで、露營の場所へ着くなり、

「分隊長殿、人間が山林中に死んでをります。」

「人間が？」と、分隊長は笑つて、

「おどかすなよ。」

「人間の死骸でありました。」

一等卒がなにかの型のやうな無心な顔をしてゐるので、

「犬かなんかだらう。」

「はつ。」と、波川一等卒はしばらく口ごもつて、

「着物を着てをりました。」

兵士達が笑ひ出した。分隊長は半ば疑ふやうに、

「波川一等卒に三四人ついて行つて、よく見て来い。」

波川一等卒はこのやうにひどい臭さを、さつきはどうして知らずに近づいたかと、われながら不思議であつた。一人の兵士が懷中電燈を照すと、屍體の足が浮き上つた。恐れは電燈の消えた瞬間にあつた。その恐れを確かめるかのやうに、懷中電燈を持つた兵士は、今度はその明りで死人の體中を撫で廻した。

「人間だ、ちがひない。」

なにがをかしいのか、それで皆一時に笑つた。歸りはおしやべりであつた。恐れは消えてゐた。

分隊長から男か女かと聞かれた時に、

「男であります。」と、答へたのが二人、

「女であります。」と、答へたのが三人あつた。

波川一等卒ともう一人の二等卒とが、所轄警察署へ報せに行つた。

南には小金井街道、北には所澤街道が通じてはゐるが、そのどちらの道へも遠く、最寄の人家へも十町以上で、あたりは一帯の山林のなかに、小さい畑地が散らばつてゐた。屍體のある雑木林は四年生くらゐの若木であつた。

一等卒と二等卒とは肩を組んで、死骸のありさまをこもこもに語り、それに合槌を打ち合ひながら、警察へ行つた。二人は聲を高め、お互ひの嘘を許して、一つの死像をつくりあげることで、相手に肉感的な愛着をつのらせながら、だんだん大股に歩いた。

残りの兵士達はいづれも死人を見物に行つた。一人が鼻をつまむと、皆が眞似をした。女であるといふことは着物で分つた。

やがて警官が来て、現場看視の夜明しの支度をする頃、兵士達は眠つた。皆の言葉が消えて十分も経つてから、一人があくびのやうに、

「ああ、あ、やるせないなあ。」

波川一等卒は金屬性のやうな星空を眺めながら、自分にはまだ一人も女が出来ないことを思つてゐた。

それから四五日、彼は皆から、

「人間が死んでをりました。」とか、

「人間の死骸でありました。」とか、からかはれた。

あれも人間であつたのかと考へてみたが、屍體のありさまはどこ一つはつきりとは思ひ出せず、夜の藥賣の繪で見た骸骨の掛軸が頭に浮ぶばかりだつた。

しかし、あの死人が安カフエか、小料理屋か、安宿の女中であるらしいといふことは、電信隊へも

傳はつて來た。波川一等卒は次の日曜日に初めて女を賣る家へ行つた。

三

首に巻きつけた細紐が、ていねいな花結びにしてあるところなどから推しても、警察當局は他殺だと認めた。しかし、顔形も肌の表も腐り果ててゐるから、被害者の身元は衣類や携帶品から判斷するよりしかたがなかつた。

屍體の傍には、バットの吸ひ残し二本と、九本入つた箱一つと、三月三日の新聞紙とが落ちてゐるだけであつた。

先づ近くの質屋や古着屋を警察署へ集めて、死人の衣類の鑑定をさせた。

半纏は木綿地に大形の押紵おしがすりがあつた。元祿袖で、襟には黒の毛繻子けじゆすを掛け、裏は木綿の赤と黒の辨慶格子縞であつた。袷は綿ネルの鼠色無地、襟は黒の瓦斯ガス八丈、裏には眞岡木綿まおかぬいの中形浴衣ゆかたをつかひ、藤色木綿の裾廻であつた。帯はメリンス腹合はらあはせの半幅物で、焦茶の流紅葉に菊の花の模様があつた。長襦袢の表胴はモス、裾廻は萩、桔梗ききやう、菊の模様の新モス、裏の胴は紅木綿、裾廻は青色のメリンスをつかつてゐる。裾除すもよけは肉色ネル、前懸は村山銘仙の緋であつた。

仕立はどれもこれもまづい。たどたどしく針を運べるだけの者が縫つたと見られた。

袷と長襦袢はつりあつてゐるが、半纏とはどうもうつりが惡かつた。これらの柄模様は流行おくれであつた。

とにかく堅氣の素人しやうとは、決してこんな風なものを身に纏つてゐないと、鑑定人達の意見が一致した。カフェか小料理屋か旅人宿の女中、土方の女房、女工、遊藝稼人、行商人、先づそれらのうちとみて